トランスアトランティック合評会に、武藤先生、宮本先生に参加いただけたことは大いなる喜びで、その場でも言ったのだが、来ていただいた時点で、この合評会は成功だったと思っている。

個別の論文についての有意義なコメントもあるが、両先生のご意見をいただいて思ったのは、このプロジェクトの立ち位置、自身がどのような立場から、どのような見通しを持って、なにを批評しなにを批判するのかを、もう一度考えたしかなものにすることの重要性である。

このプロジェクト全体の方針や方向性と細部においては異なるとこもあるかもしれないが、私個人の意識としては、

１）新自由主義（とそれによるグローバル化）の支配の強化のなかで、「左翼的」批評の意味が変容を迫られており、簡単に言えば、格差社会を批判する視座としてマルクス主義的な批評、80 年代から 90 年代にかけて、ベルリンの壁の崩壊とともに急速にそのプレゼンスを弱めていったかつてのマルクス主義的な批評を再考することが重要に思われること、

２）合評会では半ば冗談を含め「左翼保守反動」と言ったのだが、たとえば、急速にプレゼンスを弱めたそれの一例としていわゆるマルクス主義経済学が挙げられるように、新自由主義が排除していったものとしての「左翼的」批評として、マルクス主義的な経済決定論の再考、つまり、市場原理主義に対する対立項としての唯物論的な視点はかなり重要に思われること。

３）広義のアイデンティティ・ポリティクスをポストモダニズムの徴候と同定する『ポストモダニズム』でのフレドリック・ジェイムソンの議論をふまえ、ここで言うマルクス主義的な視点とは、公共性や共同性ではなく、全体性としての社会性を考えることを指向し、そこからまた、「左翼的」な批評、もしくは、右も左も関係なく批評を、現在の歴史性とつなげることを目標とすること

が重要なのではないかと考えている。

と、まあ、頭でっかちなことを言っても、そのような方針が、現実にどのように着地できるものなのかはまた不明瞭である。とにかく、われわれの立ち居値について批評的な視点を可能たらしめてくれたコメントに感謝したい。